

山形市少年自然の家の今後のあり方について

山形市少年自然の家は、昭和 54 年の開所以来、自然に親しみながら仲間と共に「直接体験活動」を安全かつ計画的に実施できる社会教育施設として、子ども達を中心にこれまで多くの人達に利用されてきました。

しかし、少子化の影響等もあり、利用者数が長期的に減少傾向であるほか、施設の老朽化も進み多額の改修費用が予想されることから、今後も持続可能な運営を行っていくための有効な方策について、庁内にプロジェクトチームを設置し検討を続けてきました。

その検討過程では、学識経験者や利用団体関係者、地元関係者、アウトドア関係事業者がメンバーとなり設置された外部有識者会より、当施設の役割や、学校中心の利用にとどまらない施設の広範な利活用等についての提言がありました。また、サウンディング型市場調査では、民間事業者より、当施設を利活用した事業への参入意欲が示され、具体的な事業イメージ等についての提案がありました。

こうした検討の結果を踏まえ、山形市では次のとおり「山形市少年自然の家の今後のあり方」を定めます。

1. 施設の今後のあり方について

当施設は現在、自然の中における体験活動の場として、学校を中心に利用されていますが、現状の使われ方では、利用される時期に偏りがあるほか、周辺の豊かな自然環境を含めた施設機能も十分に活かしきれていません。

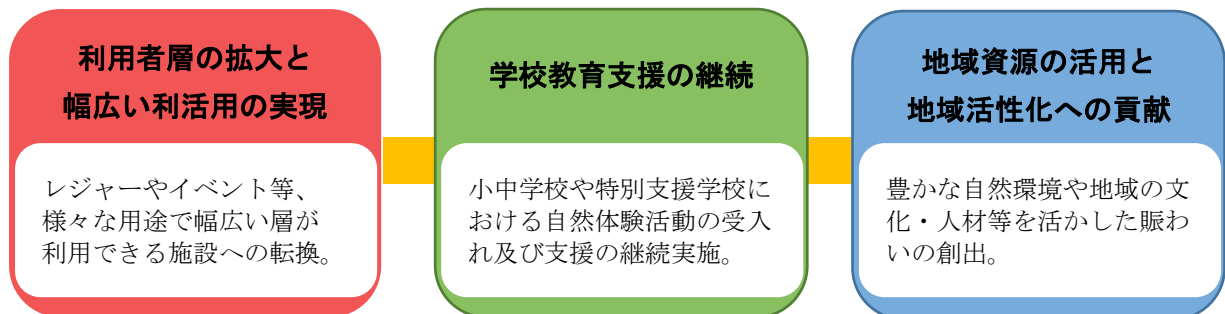
このため、学校中心の利用にとどまらず、家族でのレジャーやイベント等、様々な用途で幅広い層から利用されることにより、当施設の持つ本来のポテンシャルが十分に発揮されるものと考えます。

一方で、学校の体験活動においては、一度に多くの児童・生徒が利用できる安全な宿泊環境が必要であり、また、様々な天候においても臨機応変に体験活動が実施できる環境や支援が求められます。こうした環境や受入れ態勢を、近隣施設等で代替することには課題もあることから、学校教育の支援に不可欠な機能については、今後も当施設の役割として継続していく必要があります。

また、当施設の周辺には、山形市西部の恵まれた自然環境以外にも、豊かな地域の文化が存在するほか、それらを良く知る地元の方々が施設の運営面で活躍しています。こうした地域の資源や人材を活用しながら、当施設も含めた周辺エリア全体の活性化へと繋げていくことも重要です。

以上のことから、施設の今後のあり方については、学校教育を支援する機能を継続しつつも、教育施設という現在の施設の位置付けを見直し、子どもから大人まで、障がい者も高齢者も、幅広い層が、施設や自然環境をはじめ、地域資源の魅力を様々な用途で楽しむことができる、持続可能な施設へと転換していくことを目指します。

【基本的な方向性】



【コンセプト】

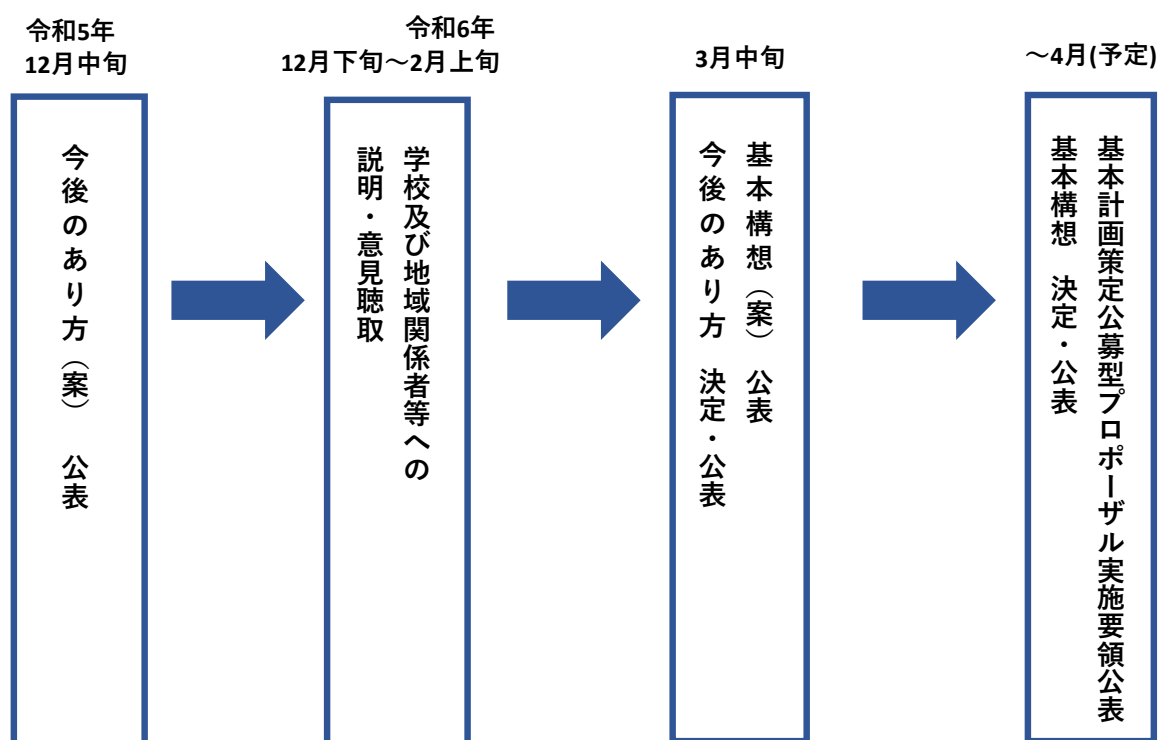
教育のための施設から、幅広い層に
「学び・遊び・集い・憩い・ふれあい」を提供する空間へ

要素	期待される姿
↑ 相 互 作 用 ↓ 学び	動植物の観察やキャンプ体験、野外炊飯活動、自然を活用したワークショップ等、学校教育をはじめ、家族や社会人等も、自然を通して学び合える空間へ
遊び	いかだアドベンチャーやフィールドアスレチック、雪上チューブ滑り等、恵まれた自然環境を利用し、子どもから大人まで、夢中で遊ぶことができる空間へ
集い	部活動やサークル活動の合宿、家族や仲間同士のアウトドア利用、野外フェスティバルの開催等、これまでには無い活用により、新たな集いや出会いが生まれる空間へ
憩い	森林浴を兼ねたウォーキングやグランピング、地域の食材を味わうことのできるレストランやカフェ等、市民の健康増進や心身のリフレッシュに繋がる憩いの空間へ
ふれあい	豊かな自然環境とのふれあいやマルシェを通じた地元生産者とのふれあい、家族や仲間、ペットと共に過ごす時間を通じたふれあい等、様々なふれあいを楽しむことができる空間へ

2. 今後の進め方

学校中心の利用にとどまらない施設の広範な利活用を持続可能な形で進めていくためには、新たなアイデアやノウハウも豊富に取り入れ、集客力のある魅力的なコンテンツ等を創出していく必要があります。

このため、その実現に向けては、今後基本構想を策定する中で、公民連携も含めて具体的な事業手法を検討していきます。



3. その他

今後のあり方への移行期間中については、可能な限り現在の受入れ事業を継続し、利用団体等への影響が最小限となるよう配慮します。

また、今後のあり方への移行にあたっては、現在の利用団体や地元従事者等、関係者等と十分な対話や調整を行いながら進めていきます。